

P1-037

NICUの看護師がおこなっている低出生体重児の親への退院にむけた支援の実態

黒川 麻里¹、松田 宣子²、山本 暁生³、高田 哲³¹神戸大学大学院保健学研究科 地域保健学領域 博士課程後期課程²関西国際大学 保健医療学部看護学科 在宅・公衆衛生看護学³神戸大学大学院保健学研究科 地域保健学領域

低出生体重児が自宅に移行する時期は、児と家族がNICUでの支援により形成してきた親子関係をもとに専門職の支援を離れ育児を始める時期である。母親の不安は児の退院後にも持続することが知られており、入院中から退院後の生活を見越した関わりが求められている。今回、私達はNICUにおける退院にむけた支援の実態を調査したので報告する。

【研究目的】

本研究の目的は、低出生体重児の退院にむけて看護師がNICUで実施している支援を明らかにすることである。

【研究方法】

全国のNICU看護師を対象に自記式質問紙法による横断調査を行った。調査票は文献調査とNICU看護師へのインタビューを基に作成し、NICUにおける退院にむけた支援34項目で構成されていた。回答方法は「支援できている」、「支援できていない」の2検法で、「支援できていない」と回答した項目には、その理由を15項目の中から選択するよう求めた。本研究は神戸大学大学院の保健学倫理委員会の承認を得て行った。

【結果】

本研究に同意があった148施設に勤務する看護師596名を対象に調査票を配布した結果、130施設484名（回収率81.2%）から回答を得た。分析は全項目に回答があった375名（有効回答84.5%）を対象に行った。NICUにおける退院にむけた支援について「支援ができていない」と回答があった項目は、「親に面会時間外の児の様子を伝える」（98.9%）、「親に児の特徴を知らせる」（98.1%）であった。一方「支援できていない」と回答があった項目は、「低出生体重児の家族の会の紹介」（21.3%）、「ホームヘルパー制度の紹介」（23.5%）であった。支援できていない理由は「自分も地域の情報が少ない」、「地域の保健師の支援に期待している」であった。さらに、ほぼ全ての支援項目において「ゆっくりと関わられる時間がない」ことが支援できていない理由に挙がっていた。

【考察】

本調査から、児の退院後も親が継続して相談や支援を受けるための関わりや情報提供があまり行われていないことが明らかとなった。このことがNICUから自宅への移行期にある母親の育児不安を増強させる1つの要因になると考えられた。児のNICU入院中から自宅での生活を見越した家族への支援が必要であるが、児が退院していく地域は広範囲にわたり地域により異なるサービスを看護師が全て把握することは難しい。児の入院中から退院後の生活を見越した支援には、NICUと地域支援機関との組織的な連携が不可欠であると考えられる。

P1-038

5歳時の就寝時刻に影響を及ぼす3歳児の生活習慣因子

溝呂木 園子¹、鈴木 孝太¹、佐藤 美理²、
篠原 亮次²、山縣 然太郎^{1,2}¹山梨大学大学院 総合研究部 医学域 社会医学講座、²山梨大学大学院 総合研究部附属 出生コホート研究センター

【目的】

我が国において小児の睡眠不足や睡眠の質の低下が指摘されており、不適切な睡眠習慣は、特に就寝時刻が遅くなること（遅寝）に起因するといわれている。幼児期の遅寝に影響する因子としては夕食時刻やTV/DVD視聴が関連していることが報告されているが、生活習慣と睡眠習慣を縦断的に検討した報告は十分とはいえない。従って本研究では、5歳時の遅寝に影響を及ぼす3歳時の生活習慣の関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】

山梨県甲州市と共同で行っている母子保健縦断調査（甲州プロジェクト）において、2004年4月から2012年3月に3歳児健診を受診し、5歳児健診の間診票より児の睡眠情報が得られた児を対象とした。まず、主要解析として、3歳時にすでに22時以降に就寝している児を除外し、5歳時の22時以降の就寝（遅寝）と3歳時の生活習慣等との関連をロジスティック回帰解析により検討した。次に、3歳時に遅寝である児が5歳時に早寝に改善する3歳時の生活習慣についても同様に検討した。

【結果】

対象の1679人のうち、3歳時早寝群は959人で、このうち5歳時早寝は845人（88.1%）であった。3歳時遅寝群720人のうち5歳時早寝は348人（48.3%）であった。検討した3歳時の生活習慣因子は、起床時刻、睡眠時間、TV/DVD視聴時間、外遊びをよくするか、友達とよく遊ぶか、母のストレスは解消できているか、子育ては楽しいか、夕食時刻、昼寝時間を抽出した。主要解析では、性別、出生順位、家族構成、通園の有無で調整した多変量解析の結果、3歳時早寝群の5歳時の遅寝と関連していた3歳時の生活習慣因子は、起床時刻が8時以降（オッズ比（OR）2.5、95%信頼区間（CI）1.2-5.5）、20時以降の夕食（OR：3.3、95% CI：1.3-8.7）であった。サブ解析では、3歳時遅寝群でも、起床時刻が8時以前であること（OR：1.6、95% CI：1.0-2.6）と夕食時刻が20時以前であること（OR：2.8、95% CI：1.2-6.3）が5歳時に早寝に改善することと影響していた。

【考察】

3歳時の起床時刻や夕食時刻の遅れは5歳時の就寝時刻に影響を与えていた。幼少期においては、起床時刻や夕食時刻を早めに設定する等の工夫によって、将来の睡眠習慣が改善する可能性が示された。

【結論】

3歳時点の、起床時刻や夕食時刻が5歳時の就寝時刻と関連していた。